

カールグレン「Compendium」を読む(3)

中村雅之

1. 拗介音の問題

カールグレン以後の中古音研究において盛んに議論されたのは、拗介音(-i-)をめぐる問題であった。カ氏は現代諸方言や外国漢字音の分析から、韻図の1等と2等に配されるものは拗介音を持たない直音であるとし、3等と4等は拗介音を持つと考えた。3等と4等の違いについては、3等を子音的な(consonantic)介音「i」を有するものとし、4等には母音的な(vocalic)「i」を想定した。

カ氏がこのように考えた最も大きな根拠は朝鮮漢字音であった。248頁に牙喉音声母を含む3等字と4等字の朝鮮音を列挙し、3等字が直音(件 *ken* など)、4等字が拗音(堅 *kien* など)であることを示している【この朝鮮音は一種の簡略表記である。*Etudes*では *kən*/*kiən* のように記されている】。そこから3等の方が短く付随的で子音的な介音「i」を持ち、4等は強く長く母音的な介音「i」を持つと結論付けた。

一見、説得力のありそうなこの論に対して、重要な異議を唱えたのが有坂秀世である。有坂説の提示によって、中古音研究はより精緻なものになった。その後の研究は有坂説の線の上に発展したと言っても過言ではない。以下、有坂説を簡単になぞった上で、カールグレン説と有坂説の本質的な違いはどこにあったのかという点について述べてみたい。

2. いわゆる重紐の問題

有坂氏が「カールグレン氏の拗音説を評す」(『国語音韻史の研究 増補新版』所収、三省堂 1957。もと 1937-1939)において唱えた異議の第一は、カールグレンの挙げた朝鮮漢字音の例示に故意に無視された部分があるということであった。いま説明にあたり、現在一般化している術語を用いると、カ氏が示した3等韻の字はB類字(韻図の3等に配置)のみで、A類字(4等に配置)は収められていないのである。例えば「儉・險(B類)」などは示されるが「壓・厭(A類)」などは示されない。実際にはA類字も4等韻と同様に朝鮮漢字音では拗音になるから、3等韻が全て直音であるかのような例示方法は適当ではない。したがって、3等韻が全て「子音的な」介音を有したと見なすわけにはいかないことになる。

B類とA類の対立は現在では「重紐」と称される。有坂氏は朝鮮漢字音やベトナム漢字音などを基に、B類に「非口蓋的」介音「i̯」、A類に「口蓋的」介音「i」を設定した。

3. 直音4等

カールグレンが「母音的」介音を設定した4等韻については、有坂氏は切韻の時代には直音であったと仮定した。反切上字に1等や2等と同様のものが用いられることからの推論である。有坂氏によれば、4等韻は隋末から唐初にかけて拗音化し、3等韻の4等字(=A類)と合流したという。

有坂氏の直音説は純粋に理論的なもので、方言音などによる支持はないが、4等韻を直音と仮定すると、拗音の韻が減り、切韻の体系はかなり整理される。何よりも、その反切がよく説明できるという利点がある。

4. 中古音の概念

有坂氏はカールグレン説に多大な修正を施した。その功績はもちろん称えられるべきものではあるが、しかし、有坂氏がカールグレン説を完全に覆したのかといえ、必ずしもそうとは言いきれないものがある。それは二人の中古音に対する概念がやや異なっていると思われるからである。

有坂氏は、現在の我々と同様に、切韻の体系を再構成しようとしている。一方、カールグレンにとって、中古音とは切韻の体系ではなく、現代諸方言の祖語としての唐代長安音である(唐代長安音が真に祖語であるかどうかは今は措く)。したがって、切韻は中古音の最も重要な資料ではあるが、中古音そのものではない。時に、喻母3等の反切上字に匣母を用いるような古風さを備えている資料なのである。

有坂氏が考えたように4等韻がすでに隋末に拗音化したのであれば、カ氏にとってはやはり中古音としての4等韻は拗音ということになるだろう。それは現代諸方言のどれ一つとして、3等韻と4等韻の間に差異を示さない以上、当然の帰結である。

確かに、3等A類を無視したことはカ氏の大いなる過誤であるかも知れない。しかし、現代諸方言にA類とB類の差異がほとんど表れない以上、これも当然の措置であった。閩方言の一部にA類とB類の対立を示すデータがあるが、カ氏は閩方言を中古音から発達したものと見なしていないため矛盾は生じない。

残る問題は拗介音の音価であるが、カ氏の「子音的；母音的」と有坂氏の「非口蓋的；口蓋的」に決定的な差があるとは思われない。有坂氏の「非口蓋的」拗介音は全くの中舌というわけではなく「中舌的」と表現されているから、後に平山久雄氏が想定したように [ɨ] のような音声にならざるを得ない。介音として [ɨ] と [i] を発音し分けるのと、カ氏のように「短かく付随的；強く長い」という対立として区別するのは、後者の方が差異は明瞭である。重紐の対立が拗介音の対立であったという有坂説には説得力があるが、実際の発話ではカ氏の想定した区別の方が現実味があり得そうに思われる。

要するに、現代諸方言の祖語としての唐代長安音を復元するというカ氏の立場に立つならば、有坂説は決定的な打撃とはなっていないと言えるのである。